

四人称と語用論

—語りの視点とメタ表示—

塩 田 英 子

1. はじめに

2018年のノーベル文学賞を受賞したポーランドの小説家オルガ・トカルチュク (Olga Tokarczuk, 1962-) は、2019年12月に行った受賞記念講演で「第四人称の語り手」(fourth-person narrator) について言及した (Tokarczuk 2019, 小椋・久山 (訳) 2021: 36)⁽¹⁾。語りにおける四人称については、それ以前にも1935年に小説家横光利一 (1898-1947) が「純粹小説」なるものに必要不可欠な要素として提案しており、今世紀に入ってから藤井 (2004, 2012) や外山 (2010) によって再び注目を集めるようになった視点でもある。本稿は、一見文法用語のようでありながら、文学の領域において語り (narrative) の一形態として扱われてきたこの四人称について、言語学的、とりわけ語用論的観点からの考察を検討するものである。

本稿の目的は2つある。まず「四人称」と呼ばれる語りの視点とは何なのかを明確にすること、そして、その過程において、文学における語りの視点の問題がいかんして語用論的な関心事に発展しうるのかを示すことである。

英語においても、日本語においても、発話のコンテキストに関わることばの指示機能を説明する際に「人称 (person)」の概念は重要な役割を果たす。コミュニケーションの場面においては、通例、人称は3つに分類される。すなわち、話し手である一人称、聞き手である二人称、そしてそれ以外の三人称である。しかし、当該コミュニケーションそのものについて言及する場合は事情が異なる。たとえば話し手であるIが英語で“I have a dog.”といった場合、そのやりとりを外側から描写・言及した時点でIは一人称であると同時に三人称にもなる。このように、コミュニケーションについて語る際には、一人称、二人称、三人称が形作るコミュニケーションの場を観察する視点、メタレベルで外側から、アウトサイダーとしてやりとりを見つめる視点が存在するのである。

これは後に述べる四人称の視点につながる捉え方となる。

語りという文学的トピックを言語学的観点から考察する際に無視できないのは、言語・文学論争 (language-literature controversy) である。この論争は1967年から1968年にかけて、雑誌『批評試論』(*Essays in Criticism*) 誌上で展開され、言語学者と文学研究者が激しく意見を戦わせた出来事として知られている。論争の後半には文学研究者は文学作品に対する言語学からのアプローチを激しく拒絶し、言語学者の家族は要らないと言い放つ感情論にまで発展した⁽²⁾。これは当時、近接する学問領域であり、言語テキストを研究対象とするという共通点があったにもかかわらず、両者の間には埋めがたい溝が存在したことを象徴する出来事だった。もっとも、今世紀に入り、言語学の観点から文学テキストに対する研究が盛んに行われてはいるが、あくまでも言語研究の土壌に着地点を置いたものである。しかし、文学テキストが言語テキストである以上、言語学がその仕組みを解明していく必要があることは言うまでもない⁽³⁾。

本稿では、上記のような問題意識に基づき、「四人称」の語りについて語用論的観点から考察する。四人称は言語研究の対象となり得るのか、また、言語学、特に語用論的観点からのアプローチが可能なのかという問題に触れていく。そうすることで「四人称」が、言語研究と文学研究を架橋しうる語りの視点の問題について考える端緒となりうることを示す。次節ではその出発点として、人称の概念と日英語の人称の違いをまとめておく。

2. 人称とは何か

2.1. 日英語の不等価性

四人称について述べる前に、そもそも人称とは何か、明らかにしておく。斎藤ほか (編) (2015) は人称について、以下のように定義している。

- (1) 発話行為に参加する話し手と聞き手、そしてそれ以外の第三者 (人や事物) を、それぞれ区別する文法カテゴリー。話し手を指す形式を一人称、聞き手を指す形式を二人称、それ以外を指す形式を三人称と呼ぶ。

(斎藤ほか (編) 2015: 175)

また、英語の人称について Huddleston and Pullum (2002) は以下のようにまとめている。

(2) 1ST PERSON Characteristically used for the speaker or a group including at least one speaker.

2ND PERSON Characteristically used for the addressee or a group including at least one addressee but no speaker.

3RD PERSON The residual category — not 1st or 2nd.

(Huddleston and Pullum 2002: 1463)

一人称 1 人の話し手、または 2 人以上の話し手を含む集団

二人称 1 人の聞き手、または話し手を含まない 2 人以上の聞き手がいる集団

三人称 一人称でも二人称でもない、残りの人称代名詞のカテゴリ

(保坂ほか (訳) 2020: 201)

(1, 2) から、人称の概念は、発話の場が基本的に話し手と聞き手で成り立つことを前提としていることがわかる。つまり、発話に直接関与する二者がまず必須であり、必要に応じてそれ以外の存在への言及がなされると捉えることができる。また、コミュニケーションの場において、「わたし」「あなた」「それ以外」というこれらの基本的な要素は、言語間の相違をこえて設定可能な分類でもある。

しかし、これら三者を表現する方法は言語によって異なる。たとえば、日本語の人称表現と英語の人称表現は等価ではない。英語が人称に関わる名詞類を「人称代名詞 (person pronoun)」と総称するのに対して、日本語の場合は代名詞ではない。人称代名詞について、田窪 (1997) は以下のように述べている。

(3) 人称代名詞という範疇は基本的に性数格の一致のある言語において、その一致特性のみを担う範疇である。したがって、名詞と区別された統語範疇としての代名詞は閉じた語類で、原則的に語彙の出入りはない。

(田窪 1997: 14)

(3) の人称代名詞とは異なり、日本語の人称表現は開いた語類 (open

class）であり、代名詞以外の名詞句を多く含んでいる。たとえば、表 1 から明らかなように、日本語の人称表現には、英語の代名詞に相当すると考えられる表現以外にも、普通名詞が含まれている。それゆえに、英語の代名詞類とは違い、語彙が増える可能性もある開いた語類に属する。

表 1 菅井（2012）による日英語の人称名詞

	英 語	日本語
自称詞 (1 人称)	人称代名詞	人称代名詞 普通名詞
対称詞 (2 人称)	人称代名詞	人称代名詞 普通名詞
他称詞 (3 人称)	人称代名詞 普通名詞	人称代名詞 普通名詞

(菅井 2012: 96)

表 1 の人称名詞の分類は、鈴木（1973）に基づいている。鈴木（1973）は日本語の人称表現を人称代名詞とすることは「西欧語文法を下敷きにした見方」（鈴木 1973: 130）と述べて批判している。そのうえで、発話の場に関わる人称表現を自称詞（terms for self）、対称詞（address terms）、他称詞に分類している（鈴木 1973: 134）。また、近年では、日本語の人称代名詞は存在せず、人称代名詞と呼ばれるものはすべて普通名詞だという「代名詞非特立説」も展開されている（福沢 2015, 2019）。このことから、日本語と英語の人称表現は文法的に等価であるとはいえないことがわかる。さらに、田窪（1997）は人称を表す表現を人称名詞として、その特徴をまとめている。

表 2 田窪（1997）による日本語人称表現の分類

	人称が決まっている	指示対象が決まっている	呼称化必要
人称名詞	○	×	適用せず
固有名詞	×	○	×
定記述	×	○	○
再帰（代）名詞	×	×	適用せず

(田窪 1997: 41, 一部改変)

以上、見てきたように、英語と日本語の文法の基準は異なり、日本語には英語の人称代名詞に相当する分類がない、とされることがある。そこで、本稿では、日本語と英語の人称に関わる表現を広く人称表現に位置づける。

2.2. 直示投射と視点の移動

日英語の人称表現の違いは、文法的には代名詞であるか、名詞であるかの区別でもある。先述の通り、日本語の人称表現は「代名詞」と呼ぶことはできない。ただし、(1)の定義にあるような、発話の場における参与者 (participant) を指し示す、といった機能面での区別においては、日英語の人称表現は共通していると考えられる。このような発話の場に関わることばの側面に注目した言語学の一領域に語用論 (pragmatics) がある。語用論においては人称をも含めた発話の場に関わる指示を直示 (deixis) に位置づけている。この直示の概念を用いれば、日本語と英語の文法的な違いを越え、コミュニケーションにおける人称表現の働きを包括的に記述することができる可能性がある。

まず、発話の場に関わる直示には人称、時間、場所等が含まれる。ここでの指示は「わたし—ここ—いま (“I-here-now”)」という直示の中心 (deictic centre, origo) からなされるのが通常である (Huang 2007: 135)。しかし、直示の中心は必ずしも固定されたものではなく、コミュニケーションの場において他の参与者に投射されることがある。それが直示投射 (deictic projection) と呼ばれる現象である。以下、一人称複数表現 *we* についての例をあげる。なお、本稿では、例文の下線や斜字化による強調は引用元の表記に従う。

- (4) a. Give us a lick of your icecream.

(Huddleston and Pullum 2002: 1467)

- b. How are we feeling this morning? Have we taken our medicine?

(Huddleston and Pullum 2002: 1467)

- c. *We're* not well today.

([看護師同士で、ある患者の容体を話題にして] 今日は機嫌が悪いのだ)

(中山 2016: 208)

まず (4a) の下線部の “us” は実際には一人称単数の *me* を意味している。つまり、ここでは一人称複数代名詞がメトニミー的に指示対象を縮小し、一人称単

数の代名詞のかわりに用いられている。

(4b) や (4c) は、(4a) と同様の複数から単数への指示範囲の縮小に加え、直示投射が見られる例である。両例の一人称複数代名詞は排他的 we (exclusive “we”) と呼ばれ、本来、指示対象に入るはずの話し手 I が we に含まれていない。たとえば (4b) で we が指し示すのは単数の受け手 you である。同様に (4c) の we は三人称である人物（この場合は患者 she/he/they）を指し示す。このような直示投射は発話が行われるコンテキスト内で、その指示対象が参与者間を水平方向へと横滑りする現象として捉えることができる。

では、垂直方向への視点の投射はありうるのだろうか。たとえば英語の場合、既存の出来事について、高次の、つまりメタレベルから状況を捉える視点を表す文法に話法 (speech) がある。

- (5) a. She said, ‘We are bound to see the elephants here today.’ (DS)
b. She said that they were bound to see the elephants there that day. (IS)

(Wales 2011: 176)

彼女は「今日ここでぜひ象を見なければならない」と言った。

(直接話法)

彼女はその日そこでぜひ象を見なければならない、と言った。

(間接話法)

(豊田ほか (訳) 2000: 192)⁽⁴⁾

(5a) は直接話法 (direct speech)、(5b) は間接話法 (indirect speech) の例である。いずれも同様の状況を示しているが、語用論的には (5a) の引用符内の表現は言語の描写的使用 (descriptive use) に基づく引用、(5b) の that 節は言語の解釈的使用 (interpretive use) に基づく引用としてとらえることができる。つまり、前者は元の状況をそのまま伝え、後者は元の状況を引用者の視点から伝えている。この場合、それぞれの伝達部 “She said” の主語 “She” は、被伝達部である that 節の内容を伝える視点に関する情報を示している。このことから、引用されている場面からすると外側にある視点であるといえる。

話法には (5) の他にも、伝達部が明示されない中間話法が存在する。

(6) They were bound to see the elephants here today. (FIS)

(Wales 2011: 176)

今日ここでぜひ象を見なければならない。(自由間接話法)

(豊田ほか(訳) 2000: 192)

上記の表現は伝達部の文法的支配から自由に表現されている、という点で自由な話法であり、自由間接話法(描出話法)と呼ばれ、文学作品の語りの一形態としてしばしば言及される。Wales (2011)によると「登場人物の《焦点化》」と語り手の《声》の混合(“The blend of character’s FOCALIZATION and narrator’s VOICE” (Wales 2011: 176))」(豊田ほか(訳) 2000: 192)であるという。このことは本来間接話法であれば“there that day”と表現されるべき部分が“here today”といったように、直接話法の視点で表現されていることからわかる。さらに出原(2021)はマンガの語りと視点の問題について考察し、日英語の自由間接話法について以下のようにまとめている。

- (7) 自由間接話法：語り手が読者に、ある登場人物に対し注意を向けさせ、さらにその登場人物の「視え」(知覚・思考)に注目させることで読者に登場人物との共感を引き起こさせようとする表現技法。その視点は、英語では、語り手が登場人物の内側に半ば潜り込んだ身体離脱視点であるが、日本語では語り手の「共同注意による主観的把握」からくる登場人物のプライヴェート視点がプロトタイプである。

(出原 2021: 218)

上記によると、自由間接話法は登場人物と語り手の視点が交錯しているにもかかわらず、首尾一貫性を保ち、かつ効果的に用いられうることがわかる。このように考えると、人称の視点は発話の参与者間という水平方向のみならず、語り手と発話の参与者という垂直方向にも転移しうるといえる。以下、ここでの考察のまとめとして視点投射の仕組みを図1として示す。

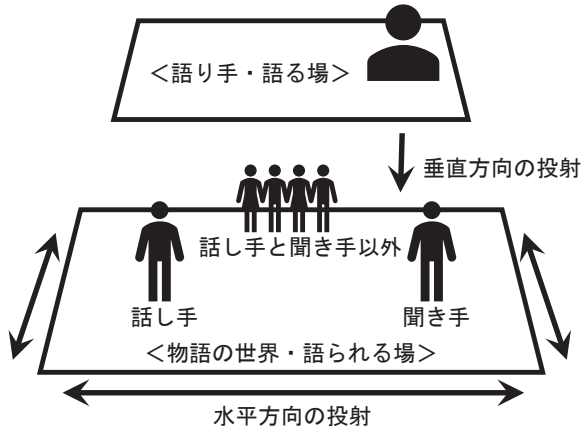


図1 語りと直示投射

上記のように、コミュニケーションにおける人称と視点は固定されたものではなく、柔軟に移動するといえよう。以下、日本語の例をあげておく。

- (8) a. The thing is, *is he getting to help me?*
 b. ?問題は、彼がわれわれを援助してくれようとしているのか。
 c. 問題は、彼がわれわれを援助してくれようとしているのかということだ。

(内田 2013: 94-95)

(8a) に対応する日本語を検討する際に、内田 (2013) は「ということだ」が必要だと指摘した。(8c) の「ということ」は語り手が「彼がわれわれを援助してくれる」という内容を自身の視点から描写している目印でもあるという。ここで語り手が「われわれ」と表現しているのは、語りの場の話し手である。つまり、垂直方向に視点が投射されていることの現れであるともいえる。内田 (2013) はまた、話し手の発話内容に対する態度をあらわす高次表意 (higher-level explication) は日本語では明記されるが英語では特に必要ないという点も指摘している (内田 2013: 95)。

以上、本節では、日英語の人称表現は完全に等価ではないということ、人称表現はコンテキストによって柔軟に指示対称が変化するという点について

述べてきた。また、指示対象が変化するのは、当該コミュニケーションの場に参加している者同士という水平方向のみならず、垂直方向、いわばメタレベルでも可能なのではないかという可能性も示してきた。このようなより広いコミュニケーションについての観点を利用すれば、個別言語の品詞の区別をも含めた文法の差を超えて、人称と視点の問題について記述することができる可能性がある。その具体例を示す前に、次の部分では本稿のテーマである四人称についてその概念を明確にしておく。

3. 四人称とメタ表示

3.1. 語りにおける四人称

先述の通り、コミュニケーションの場面における登場人物の役割は3つに分類できる。この分類は、日本語や英語といった個別言語にみられる文法体系の違いがあっても設定可能な視点でもある。また、これら3つに加えて、四人称の視点が提案されている。たとえば本稿の冒頭でもとりあげた2018年にノーベル文学賞を受賞したオルガ・トカルチュクは2019年の受賞記念講演の中で以下のように述べている。

- (9) I also dream of a new kind of narrator—a “fourth-person” one, who is not merely a grammatical construct of course, but who manages to encompass the perspective of each of the characters, as well as having the capacity to step beyond the horizon of each of them, who sees more and has a wider view, and who is able to ignore time.

(Tokarczuk 2019)

（そしてわたしは、あたらしい種類の語り手を夢んでいます。それは「第四人称」とでも呼ぶべきもので、むろんなんらかの文法的構成を担うにとどまらず、みずからのうちに登場人物それぞれの視点を含み、さらに各人物の視野を踏み越えて、より多く、よりひろく見ることのできる、時間だって無視できる、そんな語り手です。）

（小椋・久山（訳）2021: 36）

上記に加え、Tokarczuk（2019）は聖書の語り手を引き合いに出し、「すべてが見える視点、視野」（“a point of view, a perspective from where everything

can be seen” (Tokarczuk 2019, 小倉・久山 (訳) 2021: 37) とも述べている。

上記のような「四人称」というとらえ方は新しいものではなく、日本国内においては小説家横光利一が1935年に発表した評論「純粹小説論」の中ですでに提案されていた。

- (10) この「自分を見る自分」といふ新しい存在物としての人称が生じてからは、すでに役に立たなくなつた古いリアリズムでは、一層役に立たなくなつて來たのは、云ふまでもないことだが、不便はそれのみにはあらずして、この人々の内面を支配してゐる強力な自意識の表現の場合に、幾らかでも眞實に近づけてリアリティを與へようとするなら、作家はも早や、いかなる方法かで、自身の操作に適合した四人称の發明工夫をしない限り、表現の方法はないのである。……純粹小説はこの四人称を設定して、新しく人物を動かし進める可能の世界を實現していくことだ。

(横光 1982a: 241-42)

上記から、四人称とは「自分を見る自分」という強力な自意識を表現するための視点、つまり、自己をも含めたさまざまな登場人物から距離を置いて眺める視点のことであるといえる。横光 (1935) の四人称について教誓 (2007) は「語りの審級」(教誓 2007: 61) とし、以下のように解説している。

- (11) 〈四人称〉は物語内容における登場人物の視座、関係性、動きといったものを、複数性を念頭に置いて包括的に捉え、かつそれぞれの〈自意識〉＝〈自分を見る自分〉までを表現するための、〈發明工夫〉である、と解釈出来る。

(教誓 2007: 42-43)

また、横光 (1982a) の捉え方を理解した上で、坂口 (1999) は、第四人称の語り手を「無形の説話者」(坂口 1999: 558) と呼んだ。さらに、黒田 (2022) のいう、「機能としての作者」(黒田 2022: 135) へとつながっていく。また、外山 (2010) は四人称をアウトサイダーの視点として位置づけている (外山 2010: 41)⁽⁵⁾。

- (12) コミュニケーションは、第一人称と第二人称の間においておこる。その中で言及されるすべてのこと、話題は第三人称に一括される。こうして、第一、第二、第三人称によってつくられるのが、コンテキストである。……このコンテキストをもとのより大きなコンテキスト、本などから引用する人はどういう存在であるか。第一人称、第二人称でないのはもちろん、第三人称にも入らない。その外側の別の存在である。これにはまだ、名がない。それで、本書ではこれに第四人称という名をつけることにしたい。

(外山 2010: 3)

さらに、藤井（2012）は第四人称を物語人称に位置づけ、「作中人物、場面、話題……について、その会話、心内などを語り、また語り手の語りに作中人物の心情が色濃く影を落とす」（藤井 2012: 318）とまとめている。

上記の言及から、四人称とは、文法用語のような形をとっていながらも、語りの形式、物事を捉える視点といったより大きな認識の枠組みから生じた語りの視点を指すことがわかる。このことから、図1として示した投射を利用して、3つの主要な人称と、その場を俯瞰する高次の視点からなる語り手側の空間を自由に往来する観察点が四人称であるといえる。

3.2. 四人称という視点

第四人称は実際にはどのような視点を指すのか。まず、Tokarczuk（2019）から具体例を引用する。

- (13) The woman is sad, seemingly lost in thought—seemingly lost.
When I later asked her about that sadness...my mother would say that she was sad because I hadn't been born yet, yet she already missed me.
“How can you miss me when I'm not there yet?” I would ask.
I knew that you miss someone you've lost, that longing is an effect of loss.
“But it can also work the other way around,” she answered.
“Missing a person means they're there.”

(Tokarczuk 2019)

（女性は寂しそうで、もの思わしげで、心ここにあらずといった感じでした。

その寂しさについて、わたしは彼女に尋ねました。……母は答えました。あなたがまだ生まれていないから寂しかったの。あなたを恋しがっていたのよ。

「まだわたしは生まれてないのに、どうして、わたしが恋しいの」わたしは尋ねます。「だれかがいなくなったら、恋しいって言うでしょ。恋しいって、いなくなってから思うものだよ」

「でも、逆もあるのよ」母は答えました。「もしだれかを恋しく思うなら、そのだれかは、もういるのよ」

（小椋・久山（訳）2021: 45）

上記はTokarczuk（2019）の講演の最初の部分で取り上げられている四人称と思しき優しい語り手（tender narrator）のエピソードである。この優しい語り手の視点は（9）で示されていたような、「時間だって無視できる（“ignore time”（Tokarczuk 2019））」（小椋・久山（訳）2021: 36）という点からも、四人称の好例であるといえる。

（13）で特徴的なのは、現在の「母」が過去の心情について、過去の自分自身の視点からではなく、現在の自分自身の視点から語っているということである。会ったこともない子どもに、会えないのがさみしい（“miss”）と思う、さらにその対象は語られる場面には存在せず、語る場に存在する“you”なのである。ここで語り手としての「母」は現在の自分にしか知りえないことを過去の自分に当てはめている。まさに時間を超越した投射が行われている。つまり、ここで語られる視点は、状況全体を見回す現時点での視点と過去の視点に通じている。さらに、視点だけではなく、描かれている場面の物理環境においては知りえなかったコンテキスト情報を基に解釈が導き出されている。ここで過去を語る視点は一人称でもなく、二人称でもなく、まして三人称でもない。複数の視点が交錯し、過去の一人称を客体化して外側から見つめる別の一人称、つまり四人称である。

次に（10）で取り上げた横光（1982a）の四人称についても、「自分を見る自分」（横光 1982a: 241）というメタレベルでの語りの視点であることがうかがえた。この外側から見つめる視点は（14）のような外山（2010）による、アウトサイダーとしての四人称につながってくる。

(14) a. コンテキストの外側にある受け手がすべて第四人称になる。

(外山 2010: 3)

b. 読者も第四人称であるし、話を又聞きする人もそうである。非当事者がことばの伝達にかかわる場合、すべて、第四人称的性格を帯びている。

(外山 2010: 3-4)

c. 第四人称の知見は、第一人称、第二人称、第三人称の事実、現実には優先する決定力をもっている。歴史、伝統、思想の伝承は、第四人称によって行われるという一般的命題は妥当のように思われる。

(外山 2010: 89)

(14a) でいう「コンテキスト」とは描写されるコミュニケーションの場のコンテキストを意味する。先の例でいえば過去の回想の場面のことで、その過去を回想し「現在」にいる四人称は過去の出来事を客体化し、外側から眺めている。ただし、外山(2010)のいう四人称はその話を聞いている「私」(つまり、ある意味では you) にも近い。

上記のように捉えると、三者による四人称の捉え方には共通点を見出すことができる。つまり、四人称とは、描かれる対象を俯瞰するという意味で物語の受け手である読者の視点と重なり、また、物理的な制約を逃れて自由に時間や空間を行き来することができる視点である。つまり、図1でいえば、垂直方向にも水平方向にも投射が行われている視点である。このような一見とらえどころのない人称表現を包括的に説明することはできるのか、次節で検討していきたい。

4. 語用論からみた四人称

4.1. 文法不在の四人称

純粋小説についての座談会を記録した横光(1982b)には(15)のような見解が取り上げられている。

(15) 併し四人稱といふものは、何か文法家でも造つてくれると良いが、さういふわけにもいくまいが、……これからの小説は慥かに僕は四人稱がなくつちやあ書けんと思ふですね。(横光 1982b: 198)

上記の言及からわかるように、四人称については、横光自身も文法にまつわる出来事ではないと自覚していたようである。文法として四人称を設定する難しさは四人称が「文法的構成を担う」(Tokarczuk 2019) と述べた Tokarczuk (2019) の言及からもうかがえる。

- (16) And that even if I were to say, “I’m lost,” then I’d still be starting out with the words “I am”—the most important and the strangest set of words in the world.

(Tokarczuk 2019)

(そしてわたしが「わたしはいない」と言ったとしても、最初にわたしは、「わたしは」という、この世で一番大切で、一番ふしぎなこの言葉を発することになるのです。)

(小椋・久山 (訳) 2021: 5)

(16) からわかる通り、四人称は語り手と重なることもある。そのため、一人称の語りともなり得る。しかし。この語り手としての「私」は日本語においては表現されないことがある。この点については横光 (1982b) も次のように言及している。

- (17) 「私」と書かなくても、四人稱といふものはどうしても出来ますな。こいつの處分が一番困りますね。

(横光 1982b: 200)

また、語りの視点が明示されないのは何も四人称に限ったことではない。外山 (2010) はゼロ人称という用語で説明している。

- (18) 「ここへ駐車しないでください」(外山 2010: 53)

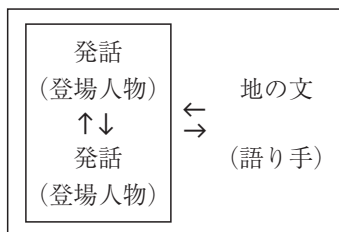
(18) のような命令文においては、一人称も二人称も表現されていない。ゆえに、ゼロ人称 (第一ゼロ人称) が第二ゼロ人称に向けて発したことばであると説明している (外山 2010: 53)。また、「日本語はゼロ人称のよく発達した言語」(外山 2010: 2) であるとも述べている。

先にあげたように、四人称の語りは一人称でありながら、自由に視点が移動

するという特徴がある。このことが可能になるのは (17, 18) にあるような、表現されない「私」というゼロ人称が関係しているからである。

しかし、ことばとして「表現されない」もの、つまり、省略されていると捉えられるのではなく、もともと存在しないのが前提となっている言語表現を文法として設定することは困難である。つまり、ここでいう四人称は所謂文法用語として捉えきれないということがわかる。そもそも、学問領域における「人称」という概念の捉え方について、福沢 (2017) は言語学の「人称」と、文学研究や日本語研究の「人称」の概念とは異なると指摘している (福沢 2017: 156)。では、四人称は語りの問題にすぎず、言語学的考察の対象にはなりえないのだろうか。先にあげたように、個別の文法にこだわらずに、コミュニケーションの場における参加者の役割といった大きな枠組みでとらえることで、一人称、二人称、三人称を設定することは可能である。また、より大きなコミュニケーションの枠組みを扱う語用論においては説明が可能であると提案したい。

たとえば言語学の研究において、内田 (2013) は文学の語りをメタ表象 (メタ表示) として捉えれば統一的な説明が可能であると指摘し、以下のような簡略図を示している。⁽⁶⁾



(作者 → 読者)

(内田 2013: 143)

図2 メタ表示としての語り

図2において、枠内のやりとりを作者が読者にメタ表示、つまり引用して伝えていると考えれば、文学テキストの語りを語用論的観点の応用で説明できる (内田 2013: 143-44)。この「引用」という考え方は2.2.で取り上げた、視点の移動としての自由間接話法 (描出話法) の問題にも関わってくる。

上記は、外山 (2010) の四人称についての考え方と大変近い。

- (19) 舞台のあらわしている世界、コンテキストは第一人称、第二人称、第三人称で完結している。観客はその外、つまり第四人称的コンテキストにおいて、芝居という仮想空間に臨むのである。普通のコミュニケーションは成立しにくいはずである。舞台と観客席の間にある目に見えない“壁”を乗り越えて、高次のコミュニケーションをしようとするところで、通常では生じにくい興味が生じる。“のぞき見”“立ち聞き”のおもしろさである。

(外山 2010: 43)

次節では、語用論の観点から四人称についてさらに考えてみたい。

4.2. メタ表示とエコー発話

引用のように、ある出来事をさらに高次の、つまりメタレベルで捉えることばの機能はメタ表示と呼ばれる。

- (20) A metarepresentation is a representation of a representation: a higher-order representation with a lower-order representation embedded within it.

(Wilson 2000: 411)

メタ表示とはある表示をさらに表示することである。つまり、低次の表示が埋め込まれた、より高次の表示のことである。

ここで埋め込まれた表示は、図2でいえば一番外側の□であり、テキストに描かれた作品世界自体である。このような枠組みにおいては、物語は作者が読者に物語内容をメタ表示（引用）して提示しているととらえることができる。

物語には常に語りの視点、テキストを提示する書き手、いわばゼロ人称の語り手が存在する。これはあまりにも当たり前のこととして見過ごされてきた。しかし、物語は、たとえ誰かであることを装っていても、常に“The author says”または“The writer says”という伝達部が隠された話法的性質をもつ。

以上を考え合わせると、語りの視点とは基本的に自由直接話法であると考えることができる。

- (21) a. She said, 'I want to see the elephants.' (DS)
b. 'I want to see the elephants.' (FDS)

(Wales 2011: 174)

「私は象を見たい」と彼女は言った。(DS)

「私は象を見たい」(FDS)

(豊田ほか (訳) 2000: 189)

(21a) の直接話法に対し、(21b) は伝達部が示されていない自由直接話法である。ここでいえるのは、「」として表現されるべき事柄はメタレベルでは物語自体であるということだ。そしてこの話法には引用符がつかない場合もある。語用論の観点から二重引用符 (“ ”) や鉤括弧 (「」) については、以下のよう
に捉えることができる。

- (22) 引用符はその内容が他に帰属するものであることを示すマーカーである。

(内田 2013: 149)

上記の点については横光 (1982b) に興味深い言及がある。

- (23) 谷崎潤一郎氏が「文章讀本」で日本人は主人公が「思つた」といふ所を括弧して書く。があれば非常に嫌ひだと書いてゐる。何故嫌ひかといふ所はちつとも書いてないが、そこに一番リアルティといふ意味の問題がある。私もやつて見るけれども括弧を非常に嫌ひな癖に、どうしてもやらずには居られないのでやつてしまふ。あれをやると、やつたところで、日本人はこれは嘘だと思つてしまふ。拵へ事だと思はしてしまふ。外國の小説を讀んでゐるとそんなときには、少しも嘘と思はないのに、日本人が書く嘘だと思ふんだから、日本の作家はつらいですよ。

(横光 1982b: 199)

(22, 23) からうかがえる通り、「」は他者に帰属する考えを表示したものである。それゆえに、見えるはずのない他者の気持ちを「」によって表示して、あたかもそれが真実であるかのように語ると、とたんに嘘になってしまう可能性

がある。先にあげたように、四人称の語り手はつねに外側にあらねばならない。Wales (2011) によると、自由直接話法は、語り手の存在を減じる働きもあるという (Wales 2011: 174, 豊田ほか (訳) 2000: 190)。つまり、四人称によって「私」を後景化することが可能となる。

先に述べた自由間接話法においては、話し手の視点から見た時制・代用表現が用いられているのに対して、自由直接話法では、元の語りがそのまま示される。語り手と読者の関係を大きなコミュニケーションの枠組みで考えると、テキスト全体を作者が読者に提示するには、作品は常に自由直接話法で示されなければならない。少なくともそう装っていなければ物語として読まれなくなってしまう。

メタ表示とコミュニケーションを考える際に重要なのは、以下に示す発話のエコー的用法 (echoic use) である。

- (24) 当該発話の話し手が、自分以外の誰かの発話や思考を利用したり、その思考や発話に対する態度を示すような言語使用のこと。

(中野ほか (編) 2015: 202)

(25) に対する返答である (26) はいずれもエコー発話の例である。それぞれは (27) のように解釈される。

- (25) *Peter*: That was a fantastic film.

- (26) a. *Mary*: (happily) Fantastic.

- b. *Mary*: (puzzled) Fantastic?

- c. *Mary*: (scornfully) Fantastic!

- (27) a. She believes I was right to say / think *P*.

- b. She is wondering whether I was right to say / think *P*.

- c. She believes I was wrong to say / think *P*.

(Wilson 2000: 432, 下線引用者)

ここで (26) の発話は相手の発話の一部を繰り返すことで、相手の発話に対する態度を示している。いわば、ことばを発することについての自らの態度、つまりメタレベルでの情報を提示していると考えられる。

四人称の視点とは、語られる物語の場を外側から眺める視点であり、また、

客体化した自己を眺める視点でもあった。この視点は、自らの存在をも含む状況をメタ表示していると考えられる。その際に、どのような態度を伴うのか、といったこともまた問題になってくる。もちろん、大前提として、ある内容を物語として提示している時点で是認していると考えられるが、風刺や皮肉などの場合は乖離的態度を表すことも考えられる。

このことからいえるのは、四人称の語りにおいては、語り手とは物語を語る視点であるだけでなく、エコーされる対象でもあるということだ。この点において、四人称の語りは自己言及的な性質をはらんでもいる。

四人称といった語りの視点を分析する際には乗り越えねばならない問題が多い。言語学と文学研究の違い、言語による人称表現の捉え方の違い、話し言葉と書き言葉の違い、などである。本稿では、すべてを論じることは叶わないが、語用論的観点が解決の糸口になりうると提案したい。

5. おわりに

これまで述べてきたように、四人称は、語りの視点であるのみならず、言語学と文学という領域を越境する可能性を示す興味深い例となる。しかし、四人称を文法項目に加えることができるかどうかというと、先述の通りそれは難しい。四人称は「文法」として弁別可能な独自の数・格といった特性とは関わりなく、視点として存在するからである。以下、本稿での四人称に関する見解をまとめておく。

(28) 語用論的観点からみた四人称

- a. コミュニケーションにおいて、参与者間での水平方向への視点の投射だけではなく、語りの視点と描かれた場面内に存在する参与者との間でも垂直方向に視点が投射される。この投射が視点の柔軟な往来を可能にし、四人称の視点による語りを可能にしている。
- b. 文学テキストによる伝達はテキストには表現されない語り手がテキストの内容を読者に自由直接話法で引用していることが前提となる。表現されない語り手と表現されない受け手が存在し、その視点が四人称の視点につながる。
- c. 語りはエコー発話の一種であり、命題内容だけではなく、語用論的に態度を示すことができる可能性がある。

上記のような、四人称に関する議論は語りの一形態への言及に留まるのだろうか。本稿では四人称の視点は何も文学テキストに限ったことではなく、言語一般にみられる視点の問題と関連している可能性がある」と提案したい。

- (29) a. 「いまからではもう、今日中に、京都へ着くのは絶望的だ」
「いやまだ“のぞみ”がある」 (外山 2010: 34)
b. The dog was sick on the new carpet. (Quirk et al. 1985: 433)
c. We shall look *forward* to seeing you in the *following* month.
(寺澤 2016: 37)

たとえば (29a) は外山 (2010) によると、異なるコンテキストを動かしてねじれを生じさせることによる笑いの効果があるという。つまり、ここで笑いを生じさせるには、「望み」と新幹線「のぞみ」号の2つの異なるコンテキストが同時に想起されなければならない。そして、このジョークで笑いが生じるのは話し言葉よりも書き言葉においてである。二重引用符(“ ”)で示されている、語の転嫁の使用によって面白みが生じる。これはテキストを単一のレベルではなく、複数のコンテキストを俯瞰できるさらに高次の視点から捉えることによって可能となる。

また、(29b) は婉曲表現の例であり、犬が吐く (vomit) ことを婉曲に示している。ここで配慮が向けられているのは、表現対象の犬ではなく、聞き手であることから「何を」婉曲に表現するかではなく「誰に」表現するかが重要になってくる (塩田 2017: 46-7)。このことはつまり、単一の文における話し手と聞き手の視点が重なりあい、かつ、その解釈を行なう、読み手側から解釈してはじめて理解できる。

(29c) は逆方向の時間の捉え方が混在している例である。未来を前方ととらえ“forward”と表現しているのに対し、未来にやってくる来月は後ろに続く (following) とらえている。このように、基準点の異なる表現が文の中で違和感なく同時に用いられるのは、単にことばの慣用性だけではなく、単一の出来事を同時並行的に捉えることができる外側の視点が存在するからである。

(29) の例はどれも、当事者としてではなく、傍観者、アウトサイダーとして状況を外側から見つめる視点の存在をほのめかす。つまり、これらの例は四人称の視点を導入することで説明が容易になる可能性がある。

また、福島 (2015) はナラトロジーの観点から表現の多層性を分析し、語り

の視点について以下のように述べている。

- (30) a. 全ての言葉は潜在的に引用されている。 (福島 2015: 221)
- b. 全ての文は潜在的に自由直接話法である。 (福島 2015: 222)
- c. 現代日本語では、全ての文は潜在的に体験話法である。
(福島 2015: 225)

上記は本稿4節で述べてきた語用論からの見解に通じる。また、Tokarczuk (2019) の講演にあったような、「わたし」の現前性とも無関係ではない。さらにつきつめるとラングとしての言語に運命づけられた特性でもある。なお、これらの側面は語用論の分野においてはSperber and Wilson (1995) に代表される関連性理論によって、高次表意といった観点から議論が展開されている⁽⁷⁾。そういった意味でも語用論的観点は文学研究の領域において活発に議論されてきた語りの問題について、有効な視点を提供できる可能性がある。本稿では考察の出発点となるような提案にとどめたが、この見解をさらに証明するためには、具体例の分析や語りに関する研究の歴史を詳細に繙く必要がある。

四人称が文法として存在しないことはTokarczuk (2019) や横光 (1982b)、外山 (2010) の言及からうかがえたとおりである。しかし、文法的には存在しないからといってことばによる伝達に不要な考え方であるかといえばそうではない。むしろ、「四人称」はことばに対する視点を提供してくれるといったメタレベルの意味でも四人称的なのである。

注

- (1) 本稿で取り上げるTokarczuk (2019) はノーベル賞公式ウェブサイトにて公開されている英語版から引用する。なお、小椋・久山 (訳) (2021) はポーランド語からの翻訳である。
- (2) 2号連続で展開された言語文学論争の2回目において、Batesonは以下のような記述で議論を開始している。

Would I allow my sister to marry a linguist? It is a good question. And I suppose, if I am honest, I must admit that I would much prefer not to have a linguist in the family.

(Fowler and Bateson 1968: 176)

(妹が言語学者と結婚するといったら認めるだろうか？ 良い質問である。正直に言えば、言語学者の家族を持つなんてまっぴらだと認めねばならない。)

- (3) 言語学と文学を架橋する学問領域として文体論 (stylistics) があげられる。文

体論の観点から宮内（1998）は以下のように述べている。

文学の一部門としての文体論は、確固とした方法論をもたず、批評家の独断によって歪められる危険性を常に有しており、学問としての厳密さをもちあわせていない。それに対し言語学の一部門としての文体論は文学の芸術性を説明することができない弱点をもっている。そこで文体論を文学、言語学のどちらか一方に付随したものではなく、自律的なものとして確立することが急務となったのも当然のことであった。

（宮内 1998: 4）

(4) Wales (2011) は第3版であるが、翻訳は1989年の版に基づくため、出版年が先行している。引用箇所について大きな相違は見られないため、本稿では翻訳として引用する。

(5) 外山（2010）は、横光の四人称について「『第四人称』ということばは、この本がはじめてではない。戦前、横光利一が小説論の中において、第四人称ということばを使っている。注目はされたものの、広まらないで、今は忘れられている」（外山 2010: 4）と断っている。

(6) 内田（2013）は以下のように述べている。

……自分自身の言ったこと、思っていることをことばで伝えることもメタ表象ということになろう。テキストとの関係で言えば、地の文であろうと直接引用の形式による登場人物の発話であろうと、はたまた登場人物の心のなかを描写する自由間接話法の形式であろうと、すべて書き手によるメタ表象と考えられる。（内田 2013: 143）

(7) たとえば (i) の BEV による発話は (ii) のような高次表意を伝達している。このように発話解釈は多層のメタ表示によって成り立っていると考えられる。なお、(iia) の部分が語りの視点をあらわすにとらえることができる可能性がある。

(i) KEN: What did Andy think Jessie said?

BEV: It's Friday.

(ii) a . Bev believes that:

b . Andy thought that:

c . Jessie said that:

d . today is Friday

(Clark 2013: 202)

参考文献

Clark, B. (2013) *Relevance Theory*, Cambridge: Cambridge UP.

Fowler, R. and F. W. Bateson. (1968) "Argument II (continued): Language and Literature," *Essays in Criticism*, Volume XVIII, Issue 2, pp. 164-82.

藤井 貞和 (2004) 『物語理論講義』 東京：東京大学出版会。

藤井 貞和 (2012) 『文法的詩学』 東京：笠間書院。

福沢 将樹 (2015) 『ナラトロジーの言語学：表現主体の多層性』 東京：ひつじ書房。

福沢 将樹 (2017) 「文学の『人称』と言語学の『人称』」, 『文学・語学』 第219号,

pp. 148-60.

福沢 将樹 (2019) 「三人称普通名詞としての人称代名詞」, 『愛知県立大学日本文化学部論集』 第10号, pp. 156-42.

Huang, Y. (2007) *Pragmatics*, Oxford: Oxford UP.

Huddleston, R. and G. K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge: Cambridge UP. [保坂 道雄・吉良 文孝・塚本 聡・一條 祐哉・佐藤 健児・小澤 賢司 (訳) 『情報構造と照応表現』 東京: 開拓社, 2020.]

出原 健一 (2021) 『マンガ学からの言語研究: 「視点」をめぐって』 東京: ひつじ書房.

黒田 大河 (2022) 「フィクション論として読む『純粋小説論: 『紋章』の『私』と横光利一』, 高橋幸平・久保昭博・日高佳紀 (編) 『小説のフィクションリティ: 理論で読み直す日本の文学』 東京: ひつじ書房, pp. 133-49.

教誓 悠人 (2007) 「横光利一『機械』における〈四人称〉の問題: 「語り」の方法として」, 『近代文学試論』 第45号, pp. 41-53.

宮内 弘 (1998) 『英詩の文体論批評: イェイツ、ラーキンを中心に』 京都: 京都大学学術出版会.

中野 弘三・服部 義弘・小野 隆啓・西原 哲雄 (監修) (2015) 『最新英語学・言語学用語辞典』 東京: 開拓社.

中山 仁 (2016) 『ことばの基礎 1 名詞と代名詞』 東京: 研究社.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, London: Longman.

斎藤 純男・田口 善久・西村 義樹 (編) (2015) 『明解言語学辞典』 東京: 三省堂.

坂口 安吾 (1999) 「文章の一形式」, 『坂口安吾全集01』 東京: 筑摩書房, pp. 555-60.

塩田 英子 (2017) 「婉曲表現」, 東森勲 (編) 『対話表現はなぜ必要なのか』 東京: 朝倉書店, pp. 41-63.

菅井 三実 (2012) 『英語を通して学ぶ日本語のツボ』 東京: 開拓社.

Sperber, D. and Wilson, D. (1995) *Relevance: Communication and Cognition*, 2nd ed., Oxford: Basil Blackwell. [内田 聖二・中達 俊明・宋 南先・田中 圭子 (訳) 『関連性理論: 伝達と認知』 東京: 研究社, 1999]

鈴木 孝夫 (1973) 『ことばと文化』 東京: 岩波新書.

田窪 行則 (1997) 「日本語の人称表現」, 田窪行則 (編) 『視点と言語行動』 東京: くろしお出版, pp. 13-44.

Tokarczuk, O. 2019. "Nobel Lecture: The Tender Narrator." Translated in English by Croft, J. and A. Lloyd-Jones. *The Nobel Prize*, Nobel Prize Outreach AB, 7 December, 2019. <<https://www.nobelprize.org/prizes/literature/2018/tokarczuk/lecture/>> [小椋 彩・久山 宏一 (訳) 『優しい語り手: ノーベル文学賞記念講演』 東京: 岩波書店, 2021.]

寺澤 盾 (2016) 『英単語の世界: 多義語と意味変化から見る』 東京: 中公新書.

- 外山 滋比古 (2010) 『第四人称』 東京：みすず書房.
- 内田 聖二 (2013) 『ことばを読む、心を読む：認知語用論入門』 東京：開拓社.
- Wales, K. (2011) *A Dictionary of Stylistics*, 3rd ed., Harlow, Essex: Pearson Education. [豊田 昌倫ほか (訳) 『英語文体論辞典』 東京：三省堂, 2000.]
- 横光 利一 (1982a) 「純粹小説論」, 『定本横光利一全集 第十三巻』 東京：河出書房新社, pp. 233-45.
- 横光 利一 (1982b) 「『純粹小説』を語る」, 『定本横光利一全集 第十五巻』 東京：河出書房新社, pp. 192-210.
- Wilson, D. (2000) "Metarepresentation in Linguistic Communication," *Metarepresentations: A Multidisciplinary Perspective*, ed. by D. Sperber, Oxford: Oxford UP, pp. 411-48.

キーワード 四人称、メタ表示、話法、エコー発話